

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Some Annotations on Pieces of an Unidentified Waka: Anthology Attributed to Saigyō (Part 3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 文 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/316

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「伝西行筆未詳歌集切」私注（下）

中村 文

前回に引き続き、「伝西行筆未詳歌集切」に収載される和歌について、一首ごとの注釈を試みる。

本稿では、夏・冬の歌を収める一葉中の六首に評釈を加える。取り上げた切とその略称は次の通りである。

春敬記念書道文庫蔵「未詳歌集切」（略称「春敬」）

Ⅱ 凡例 Ⅱ

- ・ 翻刻はすでに刊行されている写真版によった。
- ・ 和歌の掲出は切ごとにまとめ、各切はできる限り季節の推移順に配列しよう心がけた。
- ・ 各歌には通し番号を振り、一首の末尾には収載する切を略称によって示し、切内部の歌順をその下に記した。
- ・ 注釈には、〈釈文〉〈通釈〉〈語釈〉〈補説〉の各項を立てた。〈釈文〉は一首の意を取りやすくするために施したもので、本文の仮名遣いの誤りを改め、適宜漢字を当て、濁点を付した。〈語釈〉の項目もこの〈釈文〉に従って立ててある。〈通釈〉には現代

語釈を、〈語釈〉には語句の意味のほか、表現としての特徴や、詠歌史的に見て特記すべきことがら等を記した。〈補説〉には一首全体の作意や構想上の特徴などを記した。

・ 「伝西行筆未詳歌集切」所載歌以外の和歌本文および歌番号は、『新編国歌大観』により、適宜私に漢字を当てて示した。万葉集の歌番号は旧番号を用いた。用例の検索はすべて『新編国歌大観』に拠っている。

注釈

14 山かつかきねをてらす月みればえたよりほかにさけるうのはな（春敬5）

〈釈文〉 山賤の垣根を照らす月みれば枝より外に咲ける卯の花

〈通釈〉 山人の（住む宿の）垣根を照らしている月（の光）を見ると、（本来咲くはずの）枝とは別（のところ）に咲いている卯花であることよ。

〈語釈〉 ○山賤の垣根 「山賤」は山家に起居し、木樵・炭焼き・

狩猟などを行う者。貴族とは対蹠的な存在で、風雅を解さない身分卑しい者。「垣根」はその住居の表徴で、王朝的優美さとは対極的な場。「あなこひし今も見てしか山賤の垣ほに咲ける大和撫子」（古今集・恋四695読人不知）、「山賤の垣ほに生へる青つづら人はくれども言づてもなし」（古今集・恋四742寵）のように、「山賤の垣ほ」の形で早くから和歌に用いられる。茨（好忠集12）・槿（為忠家初度百首393）・梅（成仲集4）等とも取り合わされる。卯花と取り合わせた作は、「山賤の垣根に咲ける卯の花は誰が白妙の衣かけしぞ」（拾遺集・夏93よみ人しらず。古今六帖77二句「垣ほに咲ける」）をはじめ数多く残り、さらに卯花と月を共に詠む作も「卯の花のさけるさかりは山賤の垣根はなれぬ月かとぞ見る」（嘉言集41）のように、比較的早い時期から見える。○枝より外枝と関連のない所で。「よよりほか」の表現は、「ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし」（古今集・秋上205よみ人しらず）のように、「よ以外に（…するものがない）」の文脈で用いられる例が多いが、あるものと本来は直接に関連がないことや、基準や範囲が及ばない意で用いた例も、「身をすててゆきやしにけむ思ふより外なる物は心なりけり」（古今集・雑下97躬恒）のように、数は少ないものの早くから見られる。「神無月もみちの山に尋ねきて秋より外の秋を見るかな」（清輔集224）、「あはれとし思はむ人は別れじを心は身よりほかのものかは」（千載集・離別489読人不知）、「染めておろす峰の紅葉のくれなゐを袖より外の物とやは見る」（拾玉集3381）等、平安末期以降はこの意で用いた詠が多く見られる。○卯の花 ユキノシタ科の落葉低木ウツギ。垣根の花として詠む作は、「鶯之 往来垣根乃 宇能花之

賦事有哉 君之不來座」（万葉集・卷十1988）をはじめ数多い。初夏に白い花を付け、雪・波・布など白いものに見立てられ、月光に見立てた歌も、「時わかず月か雪かと見るまでに垣のままに咲ける卯花」（後撰集・夏155読人不知）のように早くから繰り返し詠まれた。「月影を色にて咲ける卯花はあけば有明の心地こそせめ」（後拾遺集・夏173読人不知）、「むらむらに咲ける垣根の卯花は木の間の月の心ちこそすれ」（千載集・夏139顯輔）のごとく、月光の状況や明暗を微細に描き分けるといったバリエーションを生むもの、これらは実在する卯花を実在しない月光に見立てる点で共通する。一方で、卯花と月光が共に実在する場面を詠む作も、「白妙に咲ける垣根の卯花の色まがふまで照らす月かな」（躬恒集27）、「ふるさとの垣根に咲ける卯花をそれとも見えず照らす月かな」（忠盛集162）のように、少ないながら平安中期から詠まれたが、平安末期には、「卯花の影と思ふかほととぎす月の残れる垣根にぞ鳴く」（出観集165・月前郭公）のごとく、実在する月光を実在しない卯花に見立てる、従来とは見立ての方向を逆転させた作が出現する。

〈補説〉卯花を月に見立てる詠歌史は、〈語釈〉に示したごとく、卯花と月とが画面中で白い光として交錯・混在する作を生んだが、やがて、白さによって特徴づけられる二つの景物を、交換可能な対象として故意に錯視してみせる、「照る月に色はとられて卯花の下枝をのみぞ垣根とは見る」（頼政集116）のような構想の歌が現れる。「卯花を月光に見立てる」という伝統的な趣向を逆転させて、月光を卯花に見立てる発想も平安末期には発生していたものの、当該歌はむしろ、右掲の頼政歌や、「夏の夜は垣根続きの卯花の折

られぬ枝や有明の月」（出観集14）のような、実在する月光を実在する卯花に取り紛える構想の系列に連なっている。

当該歌の試みの新しさを表現面で支えているのが、「枝より外の」の措辞である。この措辞は当該歌以外には、永万二年¹¹⁶⁶の重家歌合で俊恵が詠んだ、「雪降れば木々の梢に咲きそむる枝よりほかの花も散りけり」（112、雪十四番右）が残るのみである。俊恵歌では「枝より外」の措辞が、花に見立てられる対象（雪）が、「本来的にその枝に咲くものではない」ことを表現するのに用いられる点も、14番歌と一致する。当該「伝西行筆未詳家集切」の料紙の製成が長寛年間（1163～1164）までの数年間とすれば、²両首は詠作時期もきわめて近接していると考えられ、影響関係が想定される。歌合では判者俊成は俊恵歌について、「木々の梢にさきそむる枝」の詞続きの指示する内容に不明確さが残る点を指摘しつつも、「枝よりほかのなどいへる姿、いとをかしければ」として勝を与え、さらに『千載集』に撰び入れた（冬466）。俊成が「枝より外」の措辞を、構想の新しさと選択された語が相俟った表現として高く評価したことは注意される。なお、定家には、「梢よりほかなる花の面影にありしつらさのにたる風かな」（拾遺愚草638花月百首）と、すでに散って梢のものでなくなった花を空枝に幻視する状況を「梢より外」と表現した作が存する。

15 ^{あき}さためなきかせになひくなをみなへしさこそあたしの、へにおふとも（春敬6）

〔釈文〕 秋 定めなき風になびく女郎花さこそあだしの野辺に生

ふとも

〔通釈〕 方向の定まらない風に靡いたりするなよ、女郎花よ。そんな風に「一時的で浮気だ」という名のあだし野に生えてはいても。

〔語釈〕 ○定めなき風 吹く方向が変わりやすい風。浮気がちで愛情が確実でない男性を暗示する。「吹く方向が一定しない風」を秋の植物と取り合わせた歌に、「こたふとも頼まざらなむ花薄ふく秋風の定めなければ」（陽成院一親王妃君達歌合46）、「定めなき風の吹かずは花薄こころと靡く方は見てまし」（後拾遺集・秋上325経衡）等があるが、花薄と取り合わせる例がほとんどで（ほかに、堀河百首633・続詞花集233など）、女郎花との組み合わせは見出せない。○なびく「なびく」は風によって植物などの先の方が横に伏すようになる意に、女性が男性に心寄せて従う意を響かせる。このように「靡く」に両意を含ませ、女郎花と取り合わせた作は、「女郎花秋の野風にうちなびき心一つを誰に寄すらむ」（古今集・秋上230時平）など数多い。○女郎花 オミナエシ科の多年草。秋の七草の一つ。女性に擬して恋情を詠むことは一般的で、「あだなりといはれの野辺の女郎花など我にしも靡かざるらん」（続詞花集・恋上540為真）のように、男性に心移しやすい女性を暗喩する例も多い。○あだしの野辺 「化野」は山城国の歌枕。現在の京都市右京区嵯峨。一時的でかりそめである意の「徒」を掛ける。「あだし野」と「女郎花」を取り合わせる例としては、『源氏物語』の「あだし野の風に靡く女郎花われしめ結はん道遠くとも」（769手習・中将）が早く、平安後期以降、「あだし野の心も知らぬ秋風にあはれ片寄る女郎花かな」（堀河百首619女郎花・基俊）、

「あだし野の露吹き乱る秋風になびきもあへぬ女郎花かな」（金葉集・秋237公実）、「あだし野と人はいへども女郎花くる秋ごとに色もかはらず」（久安百首935清輔）、「咲きにけりあだしの野辺の女郎花いつしか風に折れや伏すらん」（実家集III）等の作が残る。

〔補説〕当該歌は、女郎花に対して、「風に靡くな」と禁じている。この措辞と詠みぶりは、「女郎花」と「あだし野」を組み合わせた平安後期の他の作には認められず、当該歌は『源氏物語』手習の中將歌を典拠として詠まれた可能性がきわめて高い。『源氏物語』769番歌は、横川僧都の妹尼に引き取られて小野で暮らす浮舟、妹尼の亡き娘の婿であった中將が見そめて送った歌である。他の浮気で不実な男など心を寄せるな、私こそがあなたを定まった相手としようという内容で、自らの愛情の永続性を述べて求愛したものである。当該歌に用いられる語や措辞は、「女郎花」や「秋野」の詠歌史において常套的に用いられてきたものばかりだが、「風に靡くな」の措辞を通して『源氏物語』手習巻における浮舟の境遇と結びつけられたことで、当該歌中の「女郎花」は移り気で多情な女性という伝統的なイメージを脱し、男性の気紛れな愛情に翻弄される心細い境遇の女性像が強く打ち出されることになった。当該歌の「あだしの野辺」に掛けられた「徒」の語には、「脆くはかない」意も響かせることが意図され、また若い女性のなまめかしい美しさを示す「婀娜^{あだ}」の意も幽かに意識されているのだろう。

16 昔集／なにとなくそてになみたそこほれぬるかりなきわたる
あきのゆふくれ（春敬7）

〔釈文〕 昔集／何となく袖に涙ぞこぼれぬる雁鳴き渡る秋の夕暮
〔通釈〕 何ということもなく、（私の）袖に涙がこぼれ落ちたことだよ。雁が鳴きながら（空を）飛び渡る秋の夕暮は。

〔語釈〕 ○書集了 「集に書きをはんぬ」と読むか。何を示しているかは不詳。○何となく 行動や感情にこれといった明確な理由がないことを示す。勅撰集の初出は金葉集（冬299有仁）だが、詞花集には用例がない。散木奇歌集には四例見え、そのうちの一首「何となく物ぞ悲しき菅原や伏見の里の秋の夕暮」を入集させた千載集（秋上260）には、全四例が見える。平安末期には、西行・覚性・清輔らの家集に例があり、この頃流行した表現と知られる。「何となく」の措辞を「涙がこぼれる」ことに関連させて用いた作も、平安末期から見られる。早い例として、寂然が詠んだ「何となく涙の玉やこぼれけん峰のこの身を拾ふ袂に」（統詞花集・釈教450）や、西行との十首贈答中の「何となく露ぞこぼるる秋の田にひた引きならす大原の里」（山家集121）、また、「何となく涙ぞ落つる昔にもかはらぬ宿のけしきなれども」（重家集29）や、「何となく落つる涙にまかすればそことも見えぬ筆の跡かな」（長秋詠藻333）等がある（右四例中、統詞花集歌を除く三首は実践詠）。俊成が御室五十首で詠んだ「何となく涙ぞ落つる村雨の夕べの雲に鳴く郭公」（267）は、落涙を鳥の鳴き声と結びつける構想も当該歌と共通している。なお、「何となく」の詠歌史については、赤羽淑『定家の歌一首』第一章（桜楓社、一九七六年）参照。○雁鳴き渡る 「離家^{イハサカ} 旅西在者^{タビニシアレバ} 秋風^{アキキゼ} 寒暮丹^{サムキヨベニ} 鴈喧渡^{カリノキワル}」（万葉集・卷七116）等、万葉集に見える措辞だが、平安期には用いられるこ

とが少なく、平安後期以降に再発見されたらしく、「思ひやれ雁なき渡る秋の夜の旅の寝覚の心細さを」（大治元年撰政左大臣家歌合3師俊）、「見渡せば稲葉そよめく夕暮のほのめく月に雁鳴き渡る」（林下集107）等の作が残る。ただし、当該歌のこの措辞は、むしろ、「鳴き渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露」（古今集・秋上21詠人不知）が発想に深く関与していると考えられる。

〔補説〕雁の鳴き声が聞く人の憂愁を一層深くすることを詠んだ作は、「うき事を思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な夜な」（古今集・秋上213躬恒）をはじめ多い。当該歌も一見すると、この発想に基づき、当時流行の表現であった「何となく」を取り合わせて仕立てた作と見える。しかし、説明的で平板な歌に陥る危険を冒してまでも、敢えて「雁鳴き渡る」の措辞に詠作主の「涙」を組み合わせたことから見て、当該歌は享受者に古今集21番歌を想起させることを意図していたと推測される。すなわち、当該16番歌は、雁が鳴きながら空を渡る秋の夕暮の総体的な情趣と、これにそぞろ哀れを催した詠作主の情感を描くのに重ねて、詠作主の袖に落ちた涙が実は古今集に詠まれたのと同様に、雁の涙であったと読みとらせる仕掛けが試みられているのだろう。当該歌は、「雁」の本意に即して秋暮の憂愁を叙しつつ、「私の袖の涙も雁の落とした涙だったのだ、萩の上の露だけではなかったのだ」と気づく、詠作主の心の動きに焦点を当てたもう一つの文脈を重ねて、重層的で奥行きのある情感を叙すことを目指した試みと解することができよう。

古今集21番歌は、『新撰和歌集』（88）に撰入され、『新撰朗詠集』にも採られて（露32）、広く親しまれていたと思われるが、雁の

涙を露に見立てる発想を前面に打ち出した作は、多くは見出せない。忠通が自家の歌合（大治元年撰政左大臣家歌合）で詠み、判者俊頼により「すゑ優なり」として勝を与えられた、「鳴く雁の涙やそらにこぼらん露けき旅の草枕かな」（6、のち万代集）は、その数少ない例で、以後の例は、「鳴き渡る雁や涙を添へつらん草の枕のいとど露けき」（為忠家初度349鞍旅雁）、「聞く人ぞ涙は落つる帰る雁なきて行くなる明ほのの空」（長秋詠藻206、月詣集149）、「帰る雁声に涙やたぐふらんがむる袖に露のおちそふ」（五杜百首113）等、俊成だけに集中して用例が見出せる。為忠家初度百首349歌を、同じ折の忠成歌「草枕かりがねの音に夢さめて露けさまさる旅衣もかな」（348）と較べると、素材や用語、描かれる心情は類似しているものの、俊成歌には「雁の涙が自分の涙になる」という構想を詠み入れようとする姿勢が明確に見て取れる。それは、「雁の声を聞いて涙する」事態の表現方法として、和歌の伝統が保持してきた二つの回路——「雁が人に憂愁の情を起こさせる」という詠み方と、「なき渡る雁が地上に涙を落とす」という詠み方——を、認識分別した上で、その双方を生かしながら一首を仕立てようとする姿勢であり、きわめて意識的に選択された方法であったと言える。以上の点と併せて、当該16番歌が、俊成が千載集に撰入した俊頼歌と、「何となく」で始まり、「秋の夕暮」で終わる一首の枠組を共有していることは、注意されるのである。

17 \ あきふかみあさちかすへにおくしものかれくくなるむし
のこゑかな（春敬8）

〔釈文〕 秋深み浅茅が末に置く霜のかれぐになる虫の声かな
 〔通釈〕 秋が深くなったので、浅茅の葉先に霜が置くが、その霜（で浅茅が枯れ枯れになる）ように、（かそけく頼りなく）絶え絶えになつていく、虫の声であるよ。

〔語釈〕 ○秋深み 「み」は原因・理由を示す接尾語。三句と四句に懸かる。○浅茅が末 「浅茅」は丈の低いチガヤ。人の訪れもない打ち捨てられた場所や荒廃した邸宅に生える植物として詠まれる。「末」はその細い葉先。「ものをのみ思ひしほどにはかなくて浅茅が末に世はなりにけり」（後拾遺集・雑三1007和泉式部）、「心ざし浅茅が末におく露のたまさかに訪ふ人は頼まじ」（金葉集・恋上408忠通）が早い例で、以後も、「風そよぐ浅茅が末の露よりもあだなる物はうき世なりけり」（久安百首791実清）、「風わたる浅茅がすゑの露にだに宿りもはてぬ宵の稲妻」（新古今・秋上377有家）のように、その葉末に置いた露と併せて、はかなさや頼りなさの表象として詠まれた。新古今時代前夜の建久年間辺りから用例が増大する。「霜」との取り合わせは、平安期においては、「冬がれの浅茅が末に置く霜の消ゆるしづくはたるひなりけり」（広言集61）等が残るのみである。○置く霜の 「の」を主格と見ると、四句に続く文脈は「霜が枯れる」と解さざるをえなくなるが、これでは意不通である。二三句は初句を受けて、晩秋の光景を叙する主文脈を形成しながらも、四五句を引き出し、ここで描き出される「次第に弱まっていく虫の音」が、いかに細く頼りなげであるかを伝える、序詞的役割を負っているものと解したい。○かれぐになる 「かれがれ」は、「山賤の垣ほわたりをいかにぞとしもかれがれにとふ人もなし」（拾遺集・雑秋1143義懐女）、「思ふど

ちあるだに秋はわびしきを草のかれがれなるぞ悲しき」（古今六帖3567）のように、「離れ離れになる（間柄が疎遠になる）」意を、植物が枯れ衰える様に寄せて詠むのに用いることが多い。当該歌では、虫の声がかれる（絶え絶えに聞こえる）意で用いるが、「かれがれ」の語を用いた詠歌史の伝統に従って、「浅茅」と「枯れ」は緩やかに響き合い、か細いチガヤの葉先が霜枯れていく風景が喚起される。虫の音が次第に弱まる現象を動詞「かる」を用いて詠む作は平安期には少なく、わずかに「風寒み幾夜もへぬに虫の音の霜より先にかれにけるかな」（玉葉集・秋下809具平親王）が残るが、この歌は平安期の歌集に見出せず、当時の程度知られていたのかは不明である。平安末・鎌倉初期の例としては、「浅茅はら色づくままに虫の音もかれがれにこそ成りまさるなれ」（寂蓮集38）がある。なお、「かれがれになる」の措辞を用いた詠も少なく、平安期の例としては、「朝夕にわがなでしこの花の色をかれがれになる袖ぞつゆけき」（定頼集178）、「よもよもとたのめし君がことのははあきたちぬればかれがれになる」（散木奇歌集1074）等が残るのみである。

〔補説〕 霜によつて枯れゆく草と、そこで鳴く虫の音を取り合わせた作品に、『和漢朗詠集』に入る、「霜草欲枯虫思苦（さうさうかれなんとしてむしのおもひねむごるなり 霜のために枯れかけている草むらから、虫の音が痛ましく聞こえてくる。）」（秋・虫328白居易）がある。この摘句を題とする、「おく霜に草のかれゆく時よりぞ虫の鳴く音も高く聞こゆる」（千里集39）では、枯れ行く叢の虫はいっそう声高く鳴いているが、当該歌は白氏句の詩境に学びながら、霜によつて衰微へと変化する草と虫の音を、「かれが

れ」の語の伝統と序詞の機能とを最大限に活用しながら結びつけ、一つの画面中に描き出して、晩秋のわびしい情感を伝えようと試みたのではないだろうか。新古今時代に入ると、当該歌と同様の内容や指向性を持つ作が、「虫の音のかれがれになる草の上に秋かけておく庭の初霜」（千五百番歌合¹⁶⁰⁵惟明親王）、「露さゆる秋の末葉の浅茅原むしの音よりぞかれはじめける」（同¹⁶¹⁶具親）、「虫の音も秋の末葉にかれはてて霜にさえ行く庭のかや原」（老若五十首歌合²⁸¹忠良）のように見られるようになり、さらに時代が下ると、「聞けばはやうら枯れにけり浅茅原虫の音までも霜や置くらん」（新拾遺集・秋下⁴⁸⁰為世）、「秋深き浅茅が庭の霜の上にかれても虫の声ぞ残れる」（同⁴⁸¹）の作が現れる。

18 かへりむふゆのためとやみむろ山もみちをしきてあきのゆくらん（春敬9）

〔釈文〕 かへりむむ冬のためとや三室山もみちを敷きて秋のゆくらん

〔通釈〕（神が）帰って来るだろう冬のためだと言うので、三室山は、紅葉を（筵道のように）敷いて、秋が去ってゆくのだらうか。

〔語釈〕 ○かへりむむ 他に例が見出せない措辞。「かへりむ（る）」も用例が少なく、「所由無」^{ヨシモナキ} 佐太乃岡辺尔^{サダノヲカヘニ} 反居者^{カヘリキバ} 嶋御橋尔^{シマノミハシニ} ^{タシカスマハム} 誰加住舞無^{タシカスマハム}（万葉集・卷二¹⁸⁷人麻呂）等、数例が見えるのみ。「また戻りここに坐すだらう」の意。「む」はまだ現実になつていない事態に関する予想を示す。「冬が帰る」と詠んだ作は少なく、「暮れて行く冬は北にや帰るらんは越路には雪つもるなり」（長秋

詠藻⁵⁷²右大臣家百首）があるものの、俊成歌は「冬の本来の場所である北方に戻って行く」意で「帰る」の語を用いている。○冬のためとや 他に例のない措辞。「〜のためとや」の表現は、「五月雨にふりいでてなげと思へども明日のためとやねを残すらん」（応和二年⁹⁶²内裏歌合¹¹佐理）等が早い例として残るが、平安期を通じて多くは用いられず、勅撰集では新古今集が初出である賀⁷⁵⁴「神世より今日のためとや八束穂に長田の稲のしなひそめけむ」兼光、他全二首）。ある季節のために何かを取り置いておくという発想の作に、「光をば秋のためとや収めけむ取り出でたりと見ゆる月影」（頼政集²⁰³、右大臣家歌合）がある。○三室山 大和国の歌枕。現在の奈良県生駒郡斑鳩町。元来、「神のまします御室」の意だが、「竜田河紅葉ば流る神奈備の御室の山に時雨降るらし」（古今集・秋下²⁸⁴）をはじめ、「紅葉」の名所として詠まれることが多い。○もみちを敷きて 山一面に紅葉する光景を示す。当該歌ではそれを秋の仕業と見立てる。「紅葉を敷きて」の形では他に用例がないが、早くから「錦」に見立てられることの多かった「紅葉」は、例えば「紅葉ばのふりしく秋の山辺こそたちてくやしき錦なりけれ」（後撰集・秋下⁴¹²読人不知）のように、「錦」の縁語「しく」としばしば取り合わされて詠まれた。紅葉を主題として「錦を敷く」と表現した作は、「朝ごとに散る紅葉ばを払はねば錦をしける庭とこそなれ」（教長集¹³⁵）、「紅葉ばのちる木のもとに宿かりて旅寝の床は錦をぞしく」（永久百首³⁶⁴落葉・大進）のように見え、おそらく、ここから生じたのであろう「紅葉を敷く」という表現も、「大井川堰せきの音のなかりせば紅葉をしける渡りとや見ん」（金葉集・秋²⁴⁸頭季）、「色色にしける紅葉の乱るれば渡

らまほしき谷のかけはし」（為忠家初度456橋上落葉・盛忠）等の作が残る。○秋のゆくらん 秋の季節が終わることを、立ち去る姿として擬人的に表現する。「らん」は原因推量。三室山が紅葉で埋まる様子を、秋が冬のために紅葉を敷いたゆえかと推量する。過ぎ去る秋を「ゆく」と表現した作に、「紅葉ばの流るる時は竜田川みなとよりこそ秋はゆくらめ」（古今六帖406、貫之集238）、「草の葉にはかなく消ゆる露をしもかたみにおきて秋のゆくらん」（金葉集・秋255師俊、散木奇歌集566）等がある。

〔補説〕初句「かへりむ」の主語は誰であろうか。二句との繋がりからは「冬」と解されるが、三室山が本来的には「神の宿る山」であったことを勘案して、「神」を主語と見るならば、初二句の意を「神が三室山に還御し坐する冬のために」と捉えることができる。そのような解釈に立つと、四句「紅葉を敷きて」の表現も「筵道」に見立てたものではないかと推測されてくる。「筵道」は、内裏の儀式において、神祇の遷座や天皇の渡御、貴人の通行などに際して進行の道筋を示すのに用いたもので、菅・蒲・藺を編んだ筵の上に白布を敷き、さらに両面錦（りょうめんきん）や薔薇錦（しょうびきん）を置くことがあった。千載集に入る「庭の面に散りて積もれる紅葉ばは九重にしく錦なりけり」（秋下369公重）も、散り積もる紅葉を筵道に見立てた作ではないだろうか。「紅葉」を「錦」に見立てる常套的な発想に依拠しながらも、その「錦」を、従来使われてきた「衣」等とは異なる用途で位置づけたもので、珍しさを狙った作と言えよう。なお、秋の終わりと紅葉を取り合わせる場合、「紅葉ばに道はうもれてあともなしづれよりかは秋はゆくらん」（古今六帖206）のように、紅葉は散り

落ちた状態を詠むのが通例であるが、「三室山に紅葉を敷く」とする当該歌では、落葉とした場合、映像が描きにくいので、一山全体に紅葉する様子を叙した表現と解してみた。

19 つしくれかな（春敬10）
あはれにもくれにしあきをこひかほにいつしかそ、くは

〔釈文〕あはれにも暮れにし秋を恋ひ顔にいつしかそ、く初時雨かな

〔通釈〕何とまあ心打たれることに、暮れて（行って）しまった秋を恋しく思う様子で、早くも（涙のごとくに）降りかかっている初時雨であるよ。

〔語釈〕○あはれにも 詠作主が景物の様態を殊勝だと捉えた、その感懐を示す。心打たれることにはの意。ここでは、去って行った秋を、時雨が恨みもせず恋しく思い続けている様子であることに對して言っている。「あはれにも」を用いた作は、「あはれにも絶えず音する時雨かな訪ふべき人もとはぬすみかに」（後拾遺集・冬380兼房）、「哀にも春をわすれずにはふかなあだなる花の心とおもふに」（統詞花集・春下56賢智法師）、「あはれにもみささにもゆる蜜かな声たてつべきこの世と思ふに」（千載集・夏202俊頼）等、用例は数多い。後拾遺集・兼房歌は『古来風躰抄』に採られた歌で、「時雨」との取り合わせも当該歌と共通し注意される。○暮れにし秋 他に三例しか見出せない措辞。平安期の用例は、「手向山嵐にまがふ紅葉はや暮れにし秋の形見なるらむ」（撰津集28）のみ。鎌倉期には、為家（為家千首506「散り残る峰の紅葉の一むらは暮

れにし秋の色しのべとや」と、宗尊親王（瓊玉集289「菊のさく籬や山とみえつらん暮れにし秋の色のやどれる」）に例がある。「秋」と「暮れにき（し）」を組み合わせた表現も見出せない。○恋ひ顔 去ってしまった秋をいかにも恋しがるかのようにの意。「恋ひ顔」は他には見出せないが、「く顔」は、意図や心境をうかがわせる外面的な様子を意味する語として、「秋風はすごく吹くとも葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ」（和泉式部集365、新古今集182）のように用いられた。当該歌と同様に、景物の様態を擬人的に表現するのに用いた例も、「尋ね来る人待ち顔に片岡の遠みに立てる花桜かな」（為忠家初度72岡辺桜・頼政）のごとく、少なからず認められる。『無名抄』には、右大臣家百首において源仲綱が「ならはし顔」の語を用いたのに対し、藤原重家が「むげにうたてきこと」と非難したことが記される。王朝的な優雅さからは逸脱した、やや卑俗な印象を与える語法であったと推察されるが、実際には、様々の語と組み合わせ多く試みられ、勅撰集にも少なからぬ用例が見出せる。○いつしか いつの間にか早くも事柄が実現していることを示す。「時雨」と取り合わせて、冬に入ると間もなく降る時雨を詠んだ例は、「さもこそは冬の初めのさがならめいつしかも降る初時雨かな」（為忠家初度449初冬時雨・頼政）、「いつしかと降りそふ今朝の時雨かな露もまだひぬ秋の名残に」（長秋詠藻261、月詠集886）のように、当該歌と同様の発想の作が、平安末期に見られる。○そくく 雨や雪などが盛んに降りかかる意の「灑ぐ」だが、室町時代末期以前は清音で発音された。「時雨がそそく」と表現した用例は多くはなく、「月も漏り時雨もそそく宿もせに何にか袖をまづ濡らしつる」（匡衡集27）が

早い、平安末期には「仮の庵はそそく時雨もとまらねば露わけ衣ほしぞかねつる」（嘉応二年1170住吉社歌合71旅宿時雨・卿）、「閨の上に折々そそくむら時雨かわける音や木の葉なるらん」（安元元年1175右大臣家歌合20落葉・清輔）の作が見える。○初時雨 その年、初めて降る時雨。「時雨」は晩秋から初冬にかけて降る驟雨だが、次第に冬の歌材として固定していく。「初時雨降るほどもなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり」（後撰集・冬44説人不知）のように、木々の葉を色づかせるものとして詠まれることがあり、またこれに基づいて、涙を時雨に、袖を木々に喩え、紅涙により袖が紅く染まるほどの恋の苦しみを述べる歌も、「わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらむ」（古今集・恋五76説人不知）のように詠まれた。

〔補説〕「そそく」の語は、「返しけむ昔の人の玉づさを聞きてぞそそく老いの涙は」（後拾遺集・雑四1086元輔）のように、涙が降り注ぐ表現としても用いられた。「涙灑蒼梧一片雲（なみだはそそくさうこのいつべんのくも）」（新撰朗詠集641將軍・在列）のように漢詩句の用例も見える。当該歌においても、「そそく」は初時雨が降る様態を、落涙の映像として受けとめさせるために用いられているのだろう。当該歌は「恋ひ顔」という卑俗な語を用いているものの、描き出そうとした境地は、冬になるや否や降り始める時雨を、男に捨て去られながらも、相手への変わらぬ恋情を姿態に滲ませながら涙する女性に重ね合わせて示すことだったのだろう。千載集には、用語が当該19番歌と多く共通する「いつしかと袖に時雨のそそくかな思ひは冬の初めならねど」（恋一692重延）が恋歌として入っており注意される。

注

- *1 池田和臣「伝西行筆未詳歌集切（二首切）考―時雨亭文庫蔵「五条殿おくりおきし」との関係、および新出断簡について―」（『古代中世文学論考』第十一集、新典社、二〇〇四年）、別府節子「伝西行筆の古筆の新出葉を中心に」（『出光美術館研究紀要』13、二〇〇八年一月）参照。
- *2 池田一臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』103、二〇〇九年三月）
- *3 訓読および現代語訳は、佐藤道生校注「和漢朗詠集」（佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集／新撰朗詠集』和歌文学大系47、明治書院、二〇一一年）に拠った。
- *4 「く顔」の用例については、稲田利徳『西行の和歌の世界』第二章第三節「西行の和歌の表現（一）―「くがほ」をめぐって―」（笠間書院、二〇〇四年）に詳しい。
- （付記）注釈作業に着手した当初は、三回の連載で完了する予定であったが、当該歌集切所載の和歌は、予想外に和歌史認識に深く関わり合う面を持ち、注釈も思いがけず長くなった。本「私注」は今後、「四」以下の順号を付して継続する予定である。

Some Annotations on Pieces of an Unidentified Waka:
Anthology Attributed to Saigyō (Part 3)

NAKAMURA, Aya

キーワード：和歌、注釈、構想

Key words : waka poetry, commentary, a conception of waka